

【社会科】教科提案

一人ひとりの学びの充実をめざして
～ ひとり学習を全体学習の場面へ ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現代社会とかがわり合う教科である。社会の仕組みを学習するとは、事象を単に知識として獲得するだけでなく、「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかがわらせる中で認識され、それを追究していく過程を通して深化していくものであると考える。子どもたちは、「もの」や「こと」を通して社会に生きる人の生き様に触れ、思いや願いを知り、社会の一員として成長していく。

学習を深化させるためには、まず子どもたちに自分の意思で主体的に学んでいこうとする意欲をもたさなければならない。また、学習の中で、一人ひとりの子どもによりそいながら、学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく指導姿勢が重要となる。

例えば、「子どもたちは、今どんなことに興味・関心をもち、何を追究しようとしているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえ、どのように対象に向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。子どもたちはその追究の過程を通じて、知識・理解を獲得し、深め、よりよく問題を解決する方法や能力を身につけていくのである。この場合において指導者は学習意欲を刺激し、方向づけ、学習活動を支援する存在でなければならない。子どもたちが自ら追究する中で獲得していった知識は、単に知識の増加にとどまらない。知識を獲得するための道筋や学び方をも体得するはずである。

① 社会科における協同的な学び

社会科として協同的な学びとは、「話し合いやすさ」をメリットとして挙げるだけの学習では学びの質の高まりはないと考える。個々の学びを深めさせ、学習経過や学習成果を交換・交流させることで、三位一体の対話をいっそう深めることが協同的な学びの本質であると考えている。

単元を通して課題別のグループで意見交流し、学びを深めていく場合や、本時において、教師が働きかけることにより、学びの質の高まりを期待する場合もある。どちらも教師のみとりと支援が大切である。

② 社会科における焦点化のポイント

「本時の中で学びの質の高まりを意識した焦点化」では、子どもたち主体で、学びを深めていくことがある。これは、子どもまかせにするということではなく土台となる学級風土を作っていく中で育まれるものである。また、協同的な学習の中での気づきや、教師の働きかけによる焦点化の場合もある。次に、「学びに向かわせていく焦点化」では、切実感のある教材づくりや課題設定が必要である。そこで、問題解決意識が高まり、ひとり学習が深まると同時に課題に向かう学級風土も高まっていく。やはり、どの場面においても教師のみとりと支援が重要である。そして、社会科のねらいに自ら近づいていけるような子ども・学級集団を育てたいと考えている。

(2) 社会科でめざす子ども像

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかかわり、社会生活の中で自分はどのように生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。これは子どもたちに自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって社会科学習では、「社会的なものの見方や考え方」を

身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで、「社会科教育を通してめざすべき子ども像」を、次のように設定した。

A：事実を的確にとらえ、こだわりをもちながら学習をすすめていける子

B：社会的事象への公正な判断力を持ち、未来への生き方につなげられる子

Aの「事実を的確にとらえ」とは、事実に基づいて見たり考えたりすることである。様々な社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会的事象と出合ったときに、他者の考えと自分の考えを比較したり、共感したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で、一人ひとりが友だちとかかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると思われる。

Bの「社会的事象への公正な判断力を持ち」とは、社会的事象を一面的に理解することとどまらず、多角的・多面的にとらえることで、事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものであり、多角的・多面的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友だちと比較・交流することによって、より公正かつ総合的なものの見方ができるようになる。「未来への生き方につなげられる子」とは、自分が生活している社会に深い関心や愛着をもち、それをもとに自分なりの未来の社会像や生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ、自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして、“自分にとっては”“自分ならば”など、自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができる子に育ってほしいと願っている。

2. 社会科学習における「学びの質の高まり」

社会科学習の具体的なねらいは、子ども自らが問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ、自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。社会的事象を単なる知識の部分だけで理解するだけでなく、社会的事象を多角的・多面的にとらえることで総合的に判断することが重要である。

このようなねらいを達成し、社会科学習を一層意義深いものにしていくために、全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり、ひとり学習を発展させる場でもある。全体学習はひとり学習のために、ひとり学習は全体学習のために相互に関連し合いながら位置づけられるのである。「ぼくは〇〇だと思う。」「わたしは、〇〇についてこんな疑問をもっている。」というように、学習対象に対して個人の思いをしっかりとつことから、ひとり学習がスタートする。

学習対象と出合い、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究活動をすすめるが、このとき指導者は、誰がどんな事を調べ、どのように資料作りをしているのかを確実に把握しておくことが大切である。また、自分の疑問を解決できない子に対し、調べ方や方法を効果的に助言することもある。ひとり学習をすすめ、深めることで、地図やグラフなどの具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や関連などについて考える力、調べたことを自分なりに表現する力を伸長させることにもつながると考えている。

全体学習で話し合いが始まると、いろいろな考えがでてくる。友だちの考えをしっかりと聴き、自らの思いを出し合う中で、「なるほど、そんな見方や考え方があるんだな。」と友だちの考えに共感することや、「ぼくと〇〇さんとは考えがちがうようだから、◇◇を用意して、もう一度ぼくの意見を言い直してみよう。」というように、学習対象に対する自分の考えを見つめなおすきっかけになり、新たなひとり学習の課題が設定されることが多い。このように子どもたちで“相互の刺激”をし合い、友だちの考えを知る中で自

分の考えを一層深めることは、社会的事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育てる上でも大切である。また、友だちの知識や考えを比べたり・つなげたり・まとめたりすることで、考えや思いを再構成し、具体的な事実に対する理解が深まるのである。

校内研4年生「くらしを支える水」から

附属小が避難所となった場合、水の供給をどうするか話し合った。おくやま（校内の一番高い場所）に井戸水を作るという考え、タンクを作りそこへ浄水場の水をためておくという考え、ペットボトルを増やすために大量購入するという考えに分かれた。それぞれの意見を出し、練り合う中でたかや君から「3つのよさをいかして使い分けをする」という意見が出た（一部授業記録を抜粋）

たかや：ぼくはみんなに賛成です。まず、黒板をみてください。（C：みんな？）

たかや：黒板には、安心安全というのがあって、全部にあって全部作った方がいいと思います。

T10：全部というのは？井戸と何？タンクとペットボトルがいいの？理由いって。

たかや：みんなの意見を聞いていて、どれも安心安全なところもあるし、みんな安心安全を求めるとペットボトルも安心安全を求めているからです。

ゆうや：ぼくもP君に続けて、もし、ペットボトルがなくなったりしたら、タンクを使ったらいいしタンクがなくなったら井戸を使ったらいいし、井戸も検査をしたらいい。

そして、普段は、3つで使い分けをしたらいいと思う。

T11：どんなにわけの？

ゆうや：例えば、タンクは料理、ペットボトルは飲み水。井戸は体を洗ったり、洗濯、頭。そんなふうに使分けをしたらいいと思う。

かいと：たかや君に質問です。黒板にも安全安心って書いてあるけど、やっぱり心配もあるので1つに絞ったらいいと思う。

ゆうな：大丈夫じゃない井戸もあるし、きれいな井戸も。3つとも全部がいいっていうわけじゃなくてペットボトルにもいいところもあるし悪いところもある。井戸もタンクもペットボトルも全部いいところと悪いところがあります。だから欠点を補うといいと思う。

T13：（3つの意見の短所が書かれている板書を指して）ゆうなちゃんここなんやな。

すみれ：今、たかや君とかゆうなちゃんみんなの意見をきいて変わりました。震災のところで、リサイクルどころじゃないって言ってたけど、それで、たかや君の全部というのに近いけど、最初飲んでなくなったら井戸水を飲んだらいいと思う。しょう君とか言ってみたいけどペットボトルは配りやすいって言うてるから。そして、自分のペットボトルを置いておいて、それに井戸水を入れておいたらいいと思う。

りょう：ぼくも意見が変わって、井戸水と聞いていたけど、たかや君やゆうや君の意見を聞いて、井戸水とタンクとペットボトルにした方がいいと思います。井戸はゆうや君が言ったように使い分けして、井戸は生活用水に使って、タンクは料理、ペットは飲み水ってして使い分けしたら、水も1個に絞るよりなくなりにくいし、水って飲み水だけのものじゃなくて井戸も飲むために作るんじゃないで、井戸は無くならない水がほしいから作るんだから、生活用水も使ったらいいと思う。

ゆみこ：私もたかや君の意見を聞いて変わりました。井戸水とタンクとペットボトルを作りたい。井戸水は飲めるのも飲めないのもあるけど、タンク、ペットボトルとかはお風呂とかに使うとすぐ無くなるけど、井戸は残る。井戸水は飲めないのもあるので、不安やから、井戸水のほかにタンクとペットボトルがあるといいと思う。

この後にも、数人の子どもが友だちの意見を聞き、考えを変えた。このように他者の意見に触れ、

自己の考えを更新し変容した子どもたちの姿が本時の中で見られた。

また、単元を通して、子どもたちは、真砂浄水場という身近な教材がきっかけとなり、水、紀の川にかかわる「ひと・もの・こと」と直接触れ合うことにより、和歌山や紀の川を身近に感じるようになった。また、そこで出会った多くの方々が、学習を高めてくれる貴重な指導者となり、子どもたちにとって大きなエネルギーとなった。この出会いの一つひとつが地域の人々の願いや工夫を知るきっかけになった。そして、単元を通して、自分たちの住んでいる地域への思いをより強く持った。

子どもたちは、インタビュー、アンケートなど、様々な活動を通して、自分の思いや考えを確かなものとする事ができた。そして、いろいろな立場の人と接し、学校だけでなく現実の社会とのつながりを持ったことで、より一層、自分の考えを吟味することができ、地域社会に対する誇りと愛情を持つようとする変容が見られた。

単元を通し、個人のふりかえりカード、作文等の活用により、他者との見方・考え方の違いや自分自身の見方・考え方の変容にも気づくことができ、追究姿勢にも変化がでてきた。

3. 研究の展望

ひとり学習と全体学習を交互に取り入れる社会科学習を、より充実させるための重要なポイントとして次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

①学習単元の開発と充実、学習課題とのかかわり

子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた単元計画が必要である。また、他の友だちとの学びの交流を考慮した学習課題が大切である。学習課題とは、子どもたちの問題意識からスタートし、“相互の刺激”をし合う中で深化、発展していくものである。学習課題と出合ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめ、問題解決への追究の見通しがもてる切実感のある学習課題でなければならない。

②ひとり学習における学びの質の変容

学習課題と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者は一人ひとりのみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握しながら学習を組み立てたいと考えている。個に応じた支援をすることで、子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ、関連させながら全体学習をすすめることができる。

③対話学習の構築

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話させる中で、一人ひとりの学びの質を高めることができる。対話学習では、ともに学び、考え合う場面を特に大切にしたいと考えている。

4. 研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を、ひとり学習でみとるとともにその変容を把握する。様々な活動におけるノートや作文等で、個々の学びをみとり評価する。全体学習では、話し合い活動を通して、対話の深まり方を探り、学びの質の高まりを評価する。子ども自身が学習をふりかえる作文で、公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。

自己の変容を可視化するために単元の導入と終末には作文を書いて、自ら変容を意識し、確かめるようにしている。また、学びの足跡を掲示したもので確認したり、個々でファイリングしたりすることで、新たな課題を見つけて学びを深めている。

本時の中では、板書の工夫やふりかえりの作文を書かせることで、自己への認識を更新する子どもを育てていく。